



日本では「平成の大合併」が盛んだが、ヨーロッパの農村では依然、町や村の規模が小さいのに驚かされる。革命以来ほとんど変わらずに3万6千ものコミューンが残るフランスほどではないにせよ、ドイツにも1万4千近くのゲマインデが存在する。これまでの調査の印象からすると、役場の建物は決して立派ではなく、職員は疎らである。窓口が開いているのは平日でも午前中だけだったりする。

昨年9月、「農村経済活性化」プロジェクト研究のために訪れたフォークトブルクは1975年に七つの村が合併して成立した町である。合併して人口が約5700人余になったので、一応「町」というのが正しいようだ。ドイツの南西部、スイス、フランスとの国境区域に位置し、西側はライン川に接し、東側にはシュヴァルツヴァルトを控える。この一帯は標高200～600mの小高い丘陵地であり、カイザーシュトゥール（皇帝の椅子）と呼ばれる。ドイツの中では最も温暖な気候と水はけのよいレス土が相まって、古くからブドウが栽培され、ワイン（バーデン・ワイン）が作られていた。国境区域にはハイテク、自動車、化学工業の企業が数多く立地し、1998年以降は隣国間の往来も増えている。雇用機会の少ない北部から引っ越してくる若者も少なくない。

ここを調査地を選んだのは、ボンにある農政・農村社会学研究所（FAA）が1952年、72年、93年と3回に渡り、その社会関係の変化に焦点を当てた調査を行っているからである。研究のリーダーであるベッカー博士には町役場との仲介の労をとっていただいた。お

かげでわずか3日間ながら町長ほか町役場の職員数名、旧村（地区）の長、新住民2名、このあたりでは希有な有機ブドウ栽培農家に会って話を聞くことができた。

町役場は予想に違わずこじんまりとしていて、通り過ぎてしまうほどだった。主務、建築、土地登記、財政の四つの部署に分かれ、ハーフ勤務や実習生を含め30名が働いている。そのほかに清掃、町営プール管理、学校の守衛などの現業の職員が60名余いる。日本の役場と違って産業振興の部署がなく、町の行政は日常生活に密着した領域に限られる。役場の窓口は火曜日以外は午前中しか開いていない。

町長のシュヴァイツァー氏によると、確かにかつてのようなブドウ畑での共同作業はないが、その代わりに、大小120あまりの音楽、スポーツ、郷土史研究などのクラブの活動、つまり「新たな共同性」が地域社会を支えているのだという。

新住民でありながら町会議員を務めるオースト氏の案内で町議会を傍聴することになった。町会議員は26名、町長以外は全員名誉職（無償）である。町議会は、冬は役場で開かれるが、夏は七つの旧村が回り持ちで会場を提供する。実際、小学校の集会室に机とパイプ椅子を並べるといって、ごく簡単なものだった。新築に際しての道路敷設、州の農村開発プログラムで老朽化した建物を改修するプランの是非を図面に基づき熱心に討論していた。さすがに「計画なくして建築なし」の国である。夕方6時に始まり延々と続くので途中で失礼した。結局11時過ぎまでかかり、しかもそのあと飲み会だったらしい。

最終日、シュヴァイツァー町長の案内で町を一回りした。町長は52歳、1991年に初当選し、現在二期目である。早朝、自転車でモンドハルデと呼ばれる丘に登り、頂上から町を一望するのを日課としている。道すがら、町民と見れば手を振り、にこやかに挨拶する。来期の再選を意識しているようでもある。